

平成二十九年十月の收穫（坤）

土屋 博

II その他（第五十八回神田古本まつり）以外の場にて）

十四「和漢三才圖會」寺島良安編

（吉川弘文館、明治三十九年初版、正價金貳圓、本文一四六三頁）

古書價格二千圓也。南方熊楠が少年の頃に全文書き寫したることにて有名なる百科事典。安價なるにも拘らず比較的狀態良く、永年鶴首したる待望の書といふべし。目次は、卷一天部、卷二天文、卷三天象類、卷四時候部、卷五曆占部、卷六曆撰日神、卷七人倫類、卷八親族、卷九官位部、卷十人倫之用、卷十一經絡部、卷十二支體部、卷十三異國人物、卷十四外夷人物、卷十五技藝、卷十六藝能、卷十七嬉戲類、第十八樂器類、第十九神祭、第二十兵器より第百五造釀類まで。

十五「四十七士」大町桂月著

（弘學館、明治四十三年刊、定價金壹圓、二九二頁）

古書價格二千圓也。第一章泉岳寺の卷より第十章義士處分の卷まで、総ルビ付きなるはいと嬉し。（桂月全集第六卷（史傳三）にも掲載せらるれど、そちらはルビ無し。）末尾の文章は以下の如し。「四十七士を解せむには復讐を解せざるべからず。殊に我國は萬世一系の皇室を戴ける國にて忠孝二途なし。四十七士の精神が我國運の消長に關すること極めて大也。拙著一篇もとより大方の看に供ふるに足らず。唯之を以て四十七士の精神が永遠に一種の無線電信となりて世に傳はるや否やを驗せむと欲する也。」と。

十六「新譯日本外史」大町桂月譯評

（至誠堂、明治四十三年刊、定價金壹圓五拾錢、一一九〇頁）

古書價格三百圓也。天金。此の本の購入は三冊目なり。序より、「日本外史は余が十四五歳の頃愛讀せし書也。今幾んど三十年をへだてて之を讀むに、げに老大にして故郷にかへる時の感慨も斯くやと思はるる也。思ふに日本人の書きたる漢文の書にして日本外史ばかり長き年月にかけて多くの人に讀まれたる書物は他にあらざるべし。」とあり。

十七「修養論語」松村介石著

（如山堂、明治四十四年刊、定價金九拾錢、四五五頁）

古書價格三百圓也。著者松村介石（一八五九年生まれ、一九三九年歿）はキリスト教傳道者「四村」（内村鑑三、植村正久、田村直臣と共に）の一人なるも、明石藩士・漢學者の家に育ち、畑の違ふ本書を著せり。

十八「月雪花」芳賀矢一著

（文會堂書店、大正三年増補七版、定價金八拾錢、二四三頁）

古書價格三百圓也。初版は明治四十二年。著者曰く、『雪月花時最憶君』と白氏の句にある通り支那では雪月花といふが我國では月雪花といふ」と。花の卷には以下の記述あり。「佐久間象山の櫻賦は

石に刻まれて今東京の飛鳥山に立つて居る。櫻華を稱へた詩歌は澤山あるが文字といひ作者といひ天覽に入つた關係といひこれ程著しいものはあるまい」と。芳賀氏の學識溢るるが如し。

十九「儀式書翰文範」大町桂月著

(文會堂書店、大正四年刊、定價金壹圓五拾錢、八八〇頁)

古書價格千五百圓也。目次は上篇儀式文、第一祝賀、第二教育、第三土木、第四弔祭、下卷書翰文、年賀・祝賀・招待・見舞・弔慰・贈遺・勧誘・報知・依頼・注文・催促・問合・紹介・謝禮・謝絶・謝罪・忠告・雜信。たとへば、大久保利通「内國勸業博覽會開場式祝辭」より、「臣利通敬白、陛下、叡聖至徳の治、深く民産の興隆を慮り、こゝに内國勸業博覽會を開く。維時明治十年八月二十一日、會場の建築成るを告げ、貨物の陳列完きを稟し、變樂親臨、開場の盛典を擧ぐ」と。日本語の變遷を實感せり。

廿「名著選評 趣味の泉」大町桂月閱評、高木斐川編

(帝國教育研究會、大正十四年二十版、定價金四圓五拾錢、一五一八頁)

古書價格二千五百圓也。函入。初版は大正九年。三大軍記(平家物語、源平盛衰記、太平記)の場面、各時代の代表的作家(西鶴、近松、紅葉、露伴、樗牛、蘆花等)よりの小説戯曲の粹を收め、大町桂月氏の閱評を附す。大事にしたき一冊。

廿一「隨筆頼山陽」市島春城著

(早稻田大學出版部、大正十四年刊三版、正價金貳圓八拾錢、六三八頁)

古書價格三百圓也。天金。二冊目の購入。著者の見るところ、耶馬溪は、山勢の雄偉木會の諸峰に及ばず、溪流の美も木會川、保津川、阿賀野川に及ばず、との由。

廿二「漢和標準字典」

(中文館、昭和二年刊、定價金貳圓貳拾錢、本文二七五六頁、索引八八頁)

古書價格五百圓也。東京高等師範學校教授垣内松三・後藤朝太郎共編。

サイズ極めて小さく、内容・使ひ勝手は抜群と覺ゆ。試みに矗立をひけば、「チクリツ、高くそびえ立つ」とあり。

廿三「雄辯新年號附録 現代名演說集」

(大日本雄辯會講談社、昭和三年一月刊、四四八頁)

古書價格二千五百圓也。函入。永井柳太郎(ウイルソンからムツソリーニまで)、鶴見祐輔(東西文明の衝突と民衆政治の本質)、三宅雪嶺(敵は病氣と暗愚と罪惡)、中野正剛(挺身難に當るの心)など、綺羅星の如き雄辯家の演說、収録せらる。荒木貞雄陸軍中將、「國防の眞髓」なる演說にて曰く、「抑々國防の本義は一國國民の傳統的精神と其の文化とを永遠に護り其の完全なる發達を遂げしめ其本來の使命を果さしむるにあり」と。

廿四「藤田東湖全集第三卷 東湖詩歌集」高須芳次郎編著

(章華社、昭和十年刊、定價一圓五拾錢、三三二頁)

古書價格三百圓也。「文天祥の正氣歌に和す」の詳しき解説(約五十頁)あるは貴重なり。また「日本詩史三十首」も頼山陽の「日本樂府」と並び稱せらるべきものなり。

(平成三十年一月七日受附) I

「第五十八回神田古本まつり」より

一「詩人西行」中龍児著

(民友社、明治三十三年六版、定價拾參錢、一三五頁)

古書價格四百圓也。目次は、西行前記佐藤義清、西行後記圓位上人、旅行家西行天然と人、西行の性格其の生涯、詩人西行、西行の理想、西行と武士道、晩年と終焉。冒頭の書き出しは左の如く流麗なり。「紅花綠柳の洛陽に、決然袂を拂つて、萬丈の紅塵を去り、孤影飄然として、白雲流水に伴なひ、宇宙を醒覺大觀して、一世に超脱奔逸せる、絶大詩人の生涯は、灑々慕ふべきものある也」と。

二「日本學生寶鑑」井上哲次郎著

(大倉書店、明治三十七年刊、定價金八拾五錢、本文六九三頁)

古書價格三百圓也。二度目の購入なれどその價值有り。

著者は井上哲次郎(一八五六年生れ、一九四四年歿)なり。井上は、筑前大宰府の出身にて、菅原道眞の再來と謳はれたる秀才。東大の一期生。獨逸等留學六年餘りを経て歸國、やがて日本人として初の東京帝大哲學科教授となりたる人物。本書を繙くに冒頭は教育敕語の日本語、その漢譯及び英訳あり、次いで五箇条の御誓文、軍人敕諭と續く。口繪として菅原道眞、孔子、ソクラテス、アリストテレス、シェクスピア、カント、ゲーテ、ダーウキンの肖像畫あり。本書を執筆したる趣旨は序にある通り、「青年の志を立て之れを達するに必要なりと思惟する古賢先哲の智識を蒐集し、又之れに加ふるに自ら見る所を以てし、尙ほ卷末に青年の志氣を鼓舞し併せて美的趣味を養成するに資すべき和漢古今の詩歌等を編入し輯めて一書」としたる由。中學校、師範學校生徒の座右の伴侶たることを目指せり。本書の構成は、第一篇「自己修養の方法」、第二篇「處世及び成功の方法」、第三篇「衛生上の注意」、第四篇「書齋の樂み及び讀書法」、第五篇「宗教に対する注意」、第六篇「美的趣味の養成」、第七篇「禮法」までが井上自身の意見となり居れり。

特に興味深きは第四篇にて、「書齋は頭腦の反射」にて、「書齋を亂雜蕪雜ならしめて一向平氣で居ると云ふやうなことからば、矢張り其の人の精神状態がさう云ふ有様である」とのくだりには、亂雜なる書齋の運営管理者としての小生、内心忸怩たるものあり。

第八篇は「自警及び座右銘」にて、聖徳太子の十七条憲法、武田信玄の家訓、石川丈山の壁書、中江藤樹の學舎座右戒、山鹿素行の自警、伊藤仁齋の書齋私祝、貝原益軒の家訓、徳川光圀の壁書、伊藤東涯の自警、松平樂翁の樂亭壁書など蒐集せらる。たとへば、室鳩巢の自警條目には、「毎朝卯前後可起、毎夜子前後可臥」とあり、生活振りの指針を示す。

第九篇は「先哲遺訓」にて、「聖徳太子曰く、人尤惡なるはなし、能く教ふれば之れに従ふ」、

「菅公曰く、未だ會て邪正に勝たず」、「貝原益軒曰く、人生れて學ばざれば生れざると同じ」、「伊藤仁齋曰く、書を讀むは當に沙を掬して金を拾ふがごとくすべし、取ることは其の廣きを欲し、撰ぶこ

とは其の精しきを欲す」等の滋味深き言葉の數々竝ぶ。

第十篇は「古今詩選」、第十一篇は「和歌」、第十二篇は「俳句」、第十三篇は「西洋國歌」なり。附録として、井上自作の「孝女白菊詩」（漢文）、及び落合直文による新體詩「孝女白菊の歌」掲載せらる。當時一世を風靡し、外國語にも翻譯せられたるものなり。

かくなる書籍を愛讀し、志を立つる若者、當時數多居りたるに相違無し。

三 「現代名文集」甫守謹吾編

（益友社、大正二年刊、定價金貳圓七拾錢、一〇三二頁）

古書價格四百圓也。たとへば、芳賀矢一の「月雪花」より、「煌々たる活動の日の光西に沈めば玲瓏たる一輪の月休息の夜を照らす。月の光は溫和で日光のやうに峻烈ではない。」と。大町桂月の「百花譜」より、「郊原一路、満目すべて薄なり。夕陽沈まんとして雲色かなしみ、西風冷かにして、酸たる鳥聲、秋の恨を語る。」と。

四 「趣味修養 國民掌典」大町桂月閱、馬場峰月編纂

（帝國實業學會、大正四年四版、正價金貳圓五拾錢、一五〇二頁）

古書價格五百圓也。本書を購入するは二度目なり。新渡戸稻造、序に曰く、「英吉利の諺に『何かの事は何でも知り、何の事でも何かを知る』と云ふ事がある。一は専門の智識の深きを貴び一は普通學の廣きを重ずるの意である。・・・如何せん我國今日の普通教育は未だ科學的範圍に及んで居らぬ

五 「日本及日本人 大正六年一月號」

（政教社、大正六年一月刊、定價金八拾錢、七三〇頁）

古書價格四百圓也。特集は「學界の代表的研究」（七十餘博士）。三宅雪嶺主筆は「人類の勝利」を執筆。曰く、「人類の勝利とは言ひ換ふれば自然界の征服にして人類の自然界に對する勝利を指す」と。志賀潔醫學博士「結核病の撲滅を期す」より、「或は吾人數代の後始めて此目的に到達し得べきものなるやも知るべからずと存じ候へども、人生の最大勁敵たる、結核を撲滅せずんば止まざるの覺悟に御座候。」と。

六 「邦文日本外史」頼山陽著、池邊義象譯述

（教文社、大正十年初版、定價金四圓五拾錢、一五七二頁）

古書價格千圓也。函入。本書の購入は數冊目なるも、今回の状態頗るよし。

七 「縮刷合本 卽興詩人」森林太郎譯

（春陽堂、大正十五年二十版、定價金貳圓六拾錢、本文五六四頁）

古書價格五百圓也。縮字印刷の初版は大正三年。此の震災後校訂縮刷版にはルビ有り、極めて貴重。原本及び校訂前縮刷版にはルビ無し。ちなみに春陽堂原本は明治三十五年刊。なほ、原本の復刻版は、昭和五十九年にほるぶ出版より刊行せらる。

八「日本文法講義」山田孝雄著

(東京寶文館、大正十五年訂正四版、定價金四圓五拾錢、本文五一四頁)

古書價格二百五拾圓なり。本の状態は悪し。日本大學高等師範部の爲の講義草稿なり。

九「大日本文庫儒教篇 先哲叢談」

(春陽堂、昭和十一年刊、非賣品、五六一頁)

古書價格五百圓也。至誠堂學生文庫(大町桂月譯)にはなき先哲叢談後篇(山鹿素行を含む。)をも収録す。

十「中國詩選」鹽谷溫選

(弘道館、昭和廿八年第三版、定價三八〇圓、本文六一五頁)

古書價格五百圓也。初版は昭和九年。鹽谷溫は一八七八生れ、一九六二年歿、東京帝國大學教授。

漢學者鹽谷青山の子息、大伯父は鹽谷宕陰。

十一「荷風全集第二十五卷」

(岩波書店、昭和四十年刊、定價六百圓、五三二頁)

古書價格百圓也。斷腸亭尺牘、書簡集、補遺を収録す。明治三十三年より昭和三十四年までの書簡なり。

十二「江戸詩人選集第八卷 頼山陽 梁川星巖」入谷仙介注

(岩波書店、平成二年刊、定價三千三百圓、三五九頁)

古書價格三百圓也。頼山陽の詩、此処にては、青春の彷徨、鎮西の旅、生活の詩人、母・永遠の戀人の四分野に絞り取り上ぐ。

十三「和歌に見る日本の心」小堀桂一郎著

(明成社、平成十五年刊、定價三千五百圓、五七一頁)

古書價格三百圓也。平成一四年に刊行せられし「平成新選百人一首」の姊妹篇乃至は補遺篇の性格を有する書なり。小生の蔵書、川田順「幕末愛國歌」につきて稀覯本の最たるものとの記述あるは我が意を得たり。

(平成三十年一月七日受附)